

會



報

1953年3月

166

日本山岳會

ヒマラヤ遠

征隊を送る

伊藤秀五郎

先に歸つた田口君の小集會での報告は非常に面白かつた。今西隊長以下の踏査隊の精しい報告はまだ聞く機会がないが、成功だつたようだ。いよいよマナスルウ遠征本隊のメンバーが決つて、準備に忙しいことだろう。候補者は雲のごとくいるから、ヒマラヤ委員會も人選には一苦労したと思うが、發表された顔觸れをみると、もつとも安心のできる最上の組合せのようだ。しかしヒマラヤ登攀隊としてこんどの組に劣らない有力メンバーを揃えた遠征隊を、まだ少くとも二組ぐらいは同時に編成できるほどの陣容はあるはずだからなんといつても心強い話だ。日本の登山界も大人になつたといつていいのだろう。誰が参加するかということは問題でない。誰が行つてもよいのだ。日本の山岳界が、各方面の支持協力を得て、今の日本として能う限りの好條件をもつて組織立つた登攀隊を送るということに意義があるからだ。イギリスが初めてエヴェレストを試みたのはもう三十年の昔だし、近年は毎年のようにヨーロッパ各國から

ヒマラヤに出かけて行つてゐるから、いまだ特別に騒ぎ立てるほどの出来事ではないが、しかし日本の登山界に養われてきた永年の力量の蓄積が、このことを可能にしたのだからわれわれは大いに喜んでいいはずである。隊員の人は、委員會があらゆる角度から検討した結果であろうから、われわれは全幅の支持をもつて快よく一行を送りたい。準備にももちろん萬全を期したい。ただし相手は山であり、風神雷神以下天上のものもろの神様であつて、利権屋相手の政治の取引などとは違ふから、豫め登頂を契約するわけにもいかないし、成功の保證を得る決め手もない。われわれはただ一行の多幸を祈るばかりである。たとい不幸にして七千メートルで引返すことになつたとしても、われわれは失望しないだろう。第二回、第三回の期せばよい。その成功不成功のいかんにかかわらずこんどの第一回遠征をきつかけとして、今後さらにも続けて第二回以下の遠征隊を出したいものだ。こんどは科學班も加わつていてその收穫も期待できるが、將來は、日本學術會議か學士院あたりが中心になつて、海外に學術調査隊を派遣するようにしたものだ。その地域が高山地方の場合には、必要に應じて日

本山岳會が協力ないしは後援するという形にすればよいであろう。木暮さんのヒマラヤ研究はいつの頃から始まつたものかよく知らないが、かなり舊いことだろう。僕たちのあいだでヒマラヤ遠征のことが話題になつたのは、横さんがスイスから歸つてから二、三年たつた時分だから大正の終り頃だつた。登ることでも、書くことでも、研究でも、山にかけては人後に落ちなかつた大島君が、生前考へていたことで、自分ではその實現を見る機會をもたなかつたことが二つあつた。一つがヒマラヤ行であり、一つは日本山岳會の強化という問題であつた。後輩を勵ます意味もあつたかもしれないが、この二つのことはよくきかされた。當時大島君はまだ日本山岳會の會員ではなかつたが、日本の登山界の發達のためには山に登るものがみんな日本山岳會を守りたてて行くべきで、いくつもの小さなグループに分れて對抗するようなことは避くべきだというのが持論だつた。もつともこれはひとり大島君だけの考え方ではなく、おそらく大島君の山仲間誰もがつていた代表的意見だつたろう。ある時「僕もこんど日本山岳會に入會することにしたよ。こないだ木暮さんに會つて長いこと山

の話をしてきた。このごろ山岳會の小集會にもよくでかける。君も入會したまえ。」とすすめられた。僕もそれから間もなく入會した。當時は學校山岳部の盛んになりかけていた頃で、山岳部のある學校もまだ少なかつた。活躍していたのは、慶應、早稲田、學習院、東大、京大、北大の各大學と、舊制高校では一高、三高の外は、四高八高、松高ぐらいたつたろう。仲のいい學校もあり、多少ソリの合わない風の間柄もあつた。しかし結局將來の日本の山岳界は、われわれ現在の若いものたちが中心になつて守り立てていかなければならないのだが、それには日本山岳會をみな力で英國山岳會のように權威あるものにしたいというのが大島君たちの意見であつた。識見のある意見だつた。これはすでに今日までには實現したといつてよいであろう。ヒマラヤについては當時から色々の夢を語り合つたものである。それが三十年後のこんにち、いよいよ實現することになつたのは、かつて夢を描いた誰にとつても喜びに違いない。傳えられるところによると、今年には五ヶ國がヒマラヤ入りをすらしい。どれも成功してほしいが、とくにマナスルウ隊の多幸を祈るや切なるものがある。



ヒマラヤの 思い出

林 一彦

憧れの山深くと云う氣持も手傳い、マルシャンディ河の思い出は多い。特にドゥード・コラの合流点にあるトンジュ村(高度約一五〇〇M)前後から、アンナブルナのベースキャンプ(約三五〇〇M)迄の日は面白いことが多かったようだ。谷の流れも漸く清流を過ぎた感じで、谷沿いの道もぐんぐん高度を増して来た。時折椰子の木陰からはるか彼方の氷の峯を見れば道遠しの感がないでもなかつたが、日本で見做れた草木も見られるようになり、いつか心に張りも出来、特にポーターを變えてからは我々一行の足取りに力が加わって来たように見えた。温泉の出ているチャメと云う村を過ぎる頃からは、白い山々と共に、明るい臺地の上に點々とあるチベット風の美しい村々の景色はこの上なく私達の目を樂ませてくれた。

丁度トンジュを過ぎてから三日目の頃だつたらうか、何の豫測もなく細いマルシャンディ溪谷は、大きなU字型となつた。左手には雲にとどくような山が、氷に削られて薄紙のような稜線を残して、一枚壁となつて谷に落ちている。右には大きくアンナブルナII峯の氷壁がさきぎり、U字の谷奥には聖地ムクチナートの方の山々だらうか、小さい峯々がかたまり、モンズン後のからりとした青空に浮き出して見える。

青い空と白い峯そして廣々とした谷には無数の家畜が點々として草を喰んでいる。今迄の谷底でのじめじめした日々の苦勞は、今日の我々にとっては何でもないうちに思えてしまつた。

何時もは、我々の後になり前になりして行くポーター達も、今日は何時になく元氣良く、我々を引き離して松林の陰に見えなくなつてしまつた。百何日の長いヒマラヤの旅ではあつたが、今日のような日は、記憶に残る何日かの日であつたようだ。

しばらくたつて、既に遠くに行つたはずのポーター達の、威勢の良い歌聲が林の中から聞えて来る。こんな良い日に又楽しいことが一つあつた。何かと思ひ足を速めて行つて見ると、ポーター達がお祭り騒ぎをしている最中であつた。大勢の真中には長さ六七尺の松を立て圍りに石を集めていた。我々にも身振り手まねで、サーブも石を一つこれにおそなえせよと云う。校の所々に御幣のような紙切れがつけられて、異様な歌聲に手拍子を付して、その周圍を踊りながら廻り出した。我々も奇異でもあり楽しくもある。この雰

圍氣に酔つたように、仲間に入つて踊つてしまつた。

一騒ぎも終つてシエルバをつかまえて聞くと、マナングボットに行く旅人は、必ずここで神様に疫病と災難から護り給えと願うと云う。そう云えば、あちこちにこれと同じようなものがあつた。

所が、この馬鹿騒ぎで腸がよじれたものか、ポーターの一人が、ここから程遠くない道端で苦しみ出して倒れてしまつた。神の意に通ずるには餘りにも早かつたせいだ、お役目でもあるので看護に當つたが、時が時でもあるので云い得ぬおかしさに耐えられなかつた。シエルバやポーター達も、マナングボットの神様に一杯喰わされたと云うような顔をして病人を見ていた。

こんなたあいもない神様もあるが、いかがわしい神様もいる。

アンナブルナの歸り道。トンジュのヘッド・マンの裏庭、黒山の村人に圍まれ盛装をした女主人が自分の體重と銀貨を天秤にかけている。右手には聖水、左手に教典をもち、その周圍で四五人のバラモンが聲高らかにお経をととなえている。

同行のデイリーに、この多くの銀貨はどうするのかと聞くと、神様に供えるのだが神様と云うのは實はこの坊主共だと云うことだ。いくら少く見積つても四五千ルピー(ネパールルピー約七十圓)、分け合つて一人平均千ルピーとしても、ネパールでは一年は充分喰える金、エクスぺディションでシエルバ一人殺しても千ルピー、一寸した金だと思つていると、急

にお経が止んで老眼鏡をかけた坊主が眼鏡越しに、私の足元をさして何やらどなつてゐる。氣が付いて見ると祭壇にしているアンパを土足でふんでゐた。神域侵入と云う科なのだろう。大いに恐縮して足を引いたが、その坊主共の一人の顔を見た何と私達がクデイ(マルシャンディ下流)を通つた時、私は村醫だがマラリヤが多くて困るからキニネをくれと云つて来た男だつた。當方は後難を恐れて出してやつたものの、醫者になつたり神様になつたり、金もうけの爲にはヒマラヤの神様と云えど忙がしいことだと思つた。

こんな話はまだ良い方として、ほんとうにヒマラヤの神様にたゝられた話。

十一月上旬の一日、苦勞と思われたラルキヤ・パンジャンもヤクの力を借りて越え、マサルルカの北面ルートも見つかり、明日はサマ入りと云う秋晴の午後、高木氏と私はぶらぶらと千草原の道を下つて行つた。ここはチベットとネパールの物交をする爲、夏場の市が立つと云う。所々それらしい空屋が立ち並んでいる。白い峯には所々雲が引つかつてゐるが、廣い谷にはそれらしいものもない。

今日の行程は短かく、シンガリである以上追い立てられることもなく漫步の氣分を満喫。寫眞を撮りながら暇をつぶしていた。

所が御存知のように、ラマ地帯にはチョルテンとかマン・ダン(メン・ダンとも云う)と云う道行く人の佛心をそめるものか、道標かは知らぬが、佛畫經文の刻んだ石を並べ立てて作つたものがある。

前々から興味をそそられ、失敬するには適當な代物と考えていた時、特にこの地方では立派なものに出合せてしまつた。左はガイヤ・ラ、チベット近い秘域にある身、悠々この秋晴の天地を樂しむことを知らず、この俗物二人はオム・メニ・バドメ・フムも形良きものをと、あれやこれや授け廻り二つ三つを背の袋にはうり込んでしまつた。

日もかげり天幕地に着くと竹節氏が一寸前に着いたと云う格好で一體何處をうろついていたのか、途中随分待つたと云う。實はこれこれと云つて背中を指すと大いに眞顔で、そんなことをすると罰があたるぞ、とおどかされた。ヒマラヤの神様が佛様かたかの知れたものと、二人でや／＼して荷物箱の中に入れ入れてサマではもうすつかり忘れてしまつていた。それから四日目高木氏は氷の割目で難をこうむつた。神罰観面。彼もさることながら、私もヒマラヤの神様をもう一回見なおし、畏敬の念を新たにした次第。前者の轍を踏む勿れ、これからヒマラヤに入る人に充分注意して戴き度いと思ひます。

★ヒマラヤン・ニュース★

ナラヤン・バルバート 一九五一年六月二人のスイス登山家はパドリナート山群を踏査し、惡天候にはまづれつゝもポーターを使用しないでナラヤン・バルバートの登頂に成功した。(以上 A. A. J. 1952 より)

マナスルウ本隊への饒け

——特に若きクライマーのために——

成瀬 岩雄

凡そ、山に育くまれ、或は山の峻厳の洗禮を受け来たりし者にして、一度は、ヒマラヤの雪を踏まんと希わぬ者は無いでしょう。今回の壯舉に選ばれた隊員の内、特に六人の若きクライマーに對し、私はその幸運に對して先ず心から祝福を述べ度いのです。

戰中、戦後の物資窮乏時代から

遂に私達は「地球の第三極」へ向う機会に恵まれた。幸運と云うか。然しその「Eight thousands」は當然、手剛いに達しない。それなればこそ私達は廿數年來、營々と有形無形のたゆまない準備を續けて来た。其の間にヒマラヤではエベレスト、ウンチンジュンガ、マ、ナシガルパット其

立派な成果を

他の大物に各國の錚々たる連中が退

組んで見事に撃退されている。然し彼等はその後度彼等の貴重なる體験を、後に續く人達に残して行つて呉れている。それにも拘らず、矢張り依然として其の登頂の機会を掴み得る人達は凡ゆる條件に恵まれた場合にのみ限られるであらう。そして其の機會はなか／＼手易くはやつて来ないであらう。確に南北兩

今日まで、山への熱情を捧げ續けて来た兄等が今やヒマラヤの雪を仰ぐ事に、我々として祝福の言葉以外に何の言葉がありましようか。

兄等は各々其獨特の傳統に輝く學校山岳部の中に育くまれ、又育くんで来た傳統の保持者なのであります。そして各々その傳統の精

極の征服に次いで人類の抱く最大の挑戦を續けて止まぬヒマラヤの八千米級こそ、所謂地球の第三極と謂えるであらう。

然し、一昨年のアンナブルナにおいて初めてフランスのヘルツォーグが登頂の榮譽をになつた「第三極」の一角がくづれたのだ。世界第十位の八〇七八米

の頂に初めて人が立つたのである。ヘルツォーグの手記を讀んで私は限りない興奮を覺えた。同時に數多くの教訓を身近かに教えられた。アンナブルナは私にとつて何となくマナスルウに近いものを幾つか持つていようように思える。

彼等はドウラギリを先に試み

ました。これは兄等の先輩、或いは兄等自身が日本山岳會の傳統を守り續けて来て呉れたのであります。やがて五拾年にならんとする日本山岳會の戦後の沈滞を今日此處迄持つて来てくれたのは、實に兄等の先輩であり、兄等其自身であつたのであります。年々、其内容のにも充實向上を示して来た國民體育大會登山部門に於て、兄等の先輩並びに兄等が示された努力の結實こそ、實は此度の結果となつて表われたのであります。

私は、現代我國でなし得る最高の技術の経験者である兄等に、技術については、何等申す事はありません。先日、高木君の話であり

た爲に、アンナブルナでは時間的に非常な制約を受けている。此の點、私達は時間的に有利な立場に置かれていた。と云うのは初めからマナスルウの懷近く突込んで行く事が出来る。私達は今西隊長の先發隊によつて登攀の可能性あると思はれる登路、根據地等の有利な豫備知識を提出されてゐるからである。

そして裝備その他に就ても去年以來會の人達の涙ぐましい協力によつて現在としては最上のものが私達のために準備された。隊員も立派な人達が選ばれた。私としては申分のない立場に置かれてゐると信じてゐる。

飽く迄も全隊員の安全と云う事を條件に、立派な成果を擧げて會の諸兄への御土産となしたい。

三田 幸夫

隊員選衡經過

松方三郎

一つの登山隊というものに何が要求され、従つてその隊員を如何に選ばねばならないかということ、何よりもまず、その目標とする山が決定する。マナスルウが目的の山だということは今度の場合最初から決つていたようなものだから、この點に問題はなかつたが、それでもどの方面に可能な登路があるかは、先發隊が歸つて來てはじめてわかつたことなのだから、隊の構成、大きさ、性格についてはつきり見當がついたのは、實は去年の暮のことなのだ。しかし、そうはいつても、考へ得られるルートとか幕營地點については、何といつても今日でもまだ頭の中で考へる程度を出ていないのであるから、その點では、山こそは一段と大物であるとしても、エヴェレストの場合の方がはるかに問題が限定されているということが出来る。今回のマナスルウ隊の隊員はこうした状態の中で選ばれた。

隊は大きくわけて二つの部分から作られてゐる。登山隊と科學班とだ。そして今回はこの二つの部分を一人の隊長に直屬する、二つの獨立した單位として組成した。先發隊の場合は隊員五人の中三人までは科學班の仕事も出来ると同時に登山隊の役目も引受けられる。従つてその時々必要に應じ、あるいは登山中心に動き、また他の場合には科學中心に動き、またそのように隊員を動かすということになつてゐたが、本隊は、先發隊の經驗に鑑み、登山隊と科學班とは相互に能力を融通させるというようなものでなく、最初からそれ／＼獨立したものとした。だから科學班の二人は隊長にはその行動を報告しなければならぬが、獨自の行動をとることが出来るのである。したがつて一行十五人とはいふが、實は登山からいへば少くとも二人、あるいは三人を引いておかなければならない。三人といつたのは寫眞班の一人も登山の方では別格扱いしなければならぬからだ。

そうして残つた登山隊十二名はさらにこれを分けて見ると、隊長の下に登山班のリーダー役をつとめる者と、いわゆるマネージャー役をするものそれにドクターといつたような、年令的には四十前後の層と、一應登山だけを任務とする三十前後の若い層との二つに分れる。

登山隊は登頂が第一の目標だから若い隊員達が登山に専心することが出来る、その力が最も有効に生かされるように心を配らなければならぬが、この仕事は年の上の連中の任務なので、それを一番上において指揮するのは隊長の役目だ。隊員の選考は大體以上のような體の内部構成を頭において行つたのだが、その結果選考の方針にも相異があつた。大ざつぱにいえば、上の層に屬する隊員の人選については隊長の意向が最も重く見られ、下の層については許される範圍での廣い範圍の意見を求め、それを大いに活かして見るということになつたわけだ。

幸い戰後數回にわたる國體の経験や、その他の會の日常の仕事の上での接觸から若い優秀な隊員を発見することは苦勞はなかつた。技術も體格も、人物も、またその人の組織力も性格もこれらの機會に相當よく監察されてゐたことと證據には先輩連の人々の見解の間に大きな差違がなかつた。國體の技術役員などになつて使われることは、動員をくつた方からは貧乏くじかも知れないが、それ等を人を縱横から監察する上には非常に役立つたということに何人も異論はないだろう。若い層の中心を三十才の邊りにおいた理由は、山の經驗やまた廣く人生の經驗の深さから見て、どうしてもこの程度の年齢は入れてあることが初めてヒマラヤにぶつた今回の場合に必要だと考へたからだ。ことにまた、今度の隊のメンバーは歸つてから將來の日本の登山界の中心になつて大きな責任を負わなければならない連中なのだから、その點からしても、やはり先々までも山の仲間として一緒に行動する見當はつきりとした人物であることが望ましいと考へたのだ。

しかしながら若い連中が如何に若く氣力が強いとはいつても、また如何に日本の山では雪や氷に親しんでゐたとしても、氷河の上にたつたことがないということも事實だし、いわずヒマラヤについては初めてのことなのだから、この連中を、一方には訓練しながらまた他方には登頂計畫をたて、早く、幕僚部がなければならぬ。幕僚部を既にヒマラヤの經驗を有し、ことに先發隊の中で登山班の役割をつとめたメンバーが組織することはいうまでもない。

——三頁よりつゞき——

過ぎた嫌いが聊か見受けられる様な氣がするのですが、實は「山を樂しむ」と云う一面もあつて欲しいのであります。

「エベレストだつて何も特別の山じゃないではないか。樂な氣持で登ればいいのだ」と云つてゐるあのシブトンの言葉でも思ひ出しなげら、今回のヒマラヤに行つてくれればそれで私としては他に何も云う事は無いのです。

「Round Kanchenjunga」の著者フレッシュフィールドにも、洋傘一本を氷斧の代りに低山徘徊を樂しむ「雪線以下の山」なる著者があつた。また「Climbing and Exploration in the Karkolm Himalaya」の著者コーンウェーにも、雨に霞むアルプの山の美を讀むの一書ある事を忘れないで貰い度いのです。

ナンドコットの勇士堀田君の一行は、日本の登山界に誠に尊きフライングを與えてくれましたが、今度のヒマラヤは一躍八千米に挑むと云うのですから兄等の使命も亦大いなのです。が、何にせよまだヒマラヤと云ふものを現實に踏んだ者の少ない日本の登山界の現状ではあり、我々仲間の内にヒマラヤを知つて呉れた者が一人でも多く増えたと云うだけで、我々として喜ばしき事なのであります。

兄等の後には兄等が先輩から受け繼いだと同様の傳統の精神を兄等から受け繼いだ後輩がやがてはヒマラヤの水河を踏みしめた其の足を以て、ヒマラヤの氷壁に觸れたその手を以て、ヒマラヤを語り、導いて呉れる事の早からん事を期してゐるのです。

今私達の頭の中に去來してゐるのは、サマのベイスキャンプで兄等が三田隊長を圍んでキャンブファイアの一時を樂しみ、首の痛くなる程マナスルウの巨峰を仰ぎ見ている一幅の繪だけです。

そして、兄等が胸には純白純潔のエーデルワイスの一輪と、背には眞紅の石楠花の一枝をいだいてブリガンダキの溪谷に「歸路」を急ぐ日の一日も早からん事を期して兄等の首途を心から祝つてあります。一九五三・二・一四

★ヒマラヤン・ニュース★

パンチ・チュリ 戰時中チベットの逃亡したドイツの登山家ハインリヒ・ハラーは、一九五一年夏ニュージラランド人のフランク・トーマスとシェルバ二人をつれ出来るだけ切りつめた裝備でガルワール・ヒマラヤのパンチ・チュリ(二二、六五〇呎)を試みた。一三、五〇〇呎のベイス・キャンプからは雪崩の危険が大きく漸く二〇、〇〇〇呎の臺地にキャンプを設けたが登頂は成らなかつた。下降時ハラーと人夫は雪崩にさらわれたが幸い全員無事下山した。一行に隨つたデラ・デュンの森林研究所員は四百種以上の草花を採集した。

トリズル トリズル(二三、二六〇呎)の第三登が、一九五一年六月廿五日R・D・グリーンウッドとデラ・デュンのグルディアアル・シンによつて成された。グリーンウッドはその後ラタンパン(二〇、〇〇〇呎)に登りムリグトニ・ピーク(二二、四九〇呎)の頂下五〇〇呎に達した。

マナージャーとドクターの役割はまた大變なものだ。七トン以上の荷物を人間がかつてのあのブリガンダキの峡谷に入るのだからポーターの数は三百人位になるだろうが、その宰配をふつたり、金庫番をつとめたり、炊事設備の心配をして行くことは恐ろしく複雑な仕事にならざるを得ない。根據地につくまでは隊の主力をなすたけ大事にし、出来るだけその力を消耗させないで行くためには、こうした複雑な仕事を誰かが専門にやらなければならぬ。リニージンもつきシエルバもいることだが、時には隊が二つに分れる必要も出て来るから、實際には一人かゝりきつても、或いはこれは一人では出来ないかも知れない。

によつては、若い隊員は次に出て行く遠征隊の幹部候補生なのだから、たゞぼんやりとB・Cに送りこまれてしまふよりは、やはり或る程度ヒマラヤの旅行の難しさを経験した方がよいともいえる。日本全體からいへばたくさんさんの優れた登山家がいることだから、人選の問題になれば、いくつでも議論の餘地はあるだろうが、限られた人数で、しかも一つの隊としてのバランスや調和という點も考えなければならぬとなると、これはベルンのように人民投票で閣僚の一人々々までを選び出すようなことは出来ない。いきおい日本憲法の總理が閣僚を指名するような考え方も加味されなければならぬ。隊は一つの行動する組織として強く結ばれ、よく氣分が合っていないければならないのだから、いつも最後には人と人との結びつき、つながりの問題に歸つて来るのだ。それだけに學校とかグループとかいふ關係を離れ、一層廣い範圍からつくられた今回の遠征隊の成果については一段と深い關心を持つのであるが、おそらく今回の経験はこの點で、われわれのヒマラヤ遠征に一つのエポックを作るであろう。われわれはそれをひそかに期待しているのである。

隊員の横顔

三田 幸夫 52 (隊長)
大正14年入會、評議員、大正15年ロッキン、アルパタ峯遠征、印度滞在中シキム方面踏査、貿

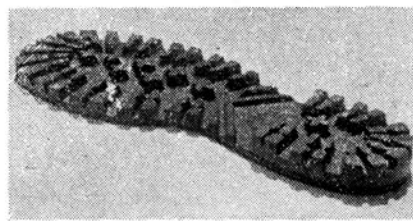
易商、慶大卒
高木 正孝 40
昭和10年入會、理事、神戸大學教授、昭和13年から23年迄ドイツ留學、アルプスに登攀、獨、埃並にスイス山岳會員、昨年マナスル踏査員として活躍、東大卒
田口 二郎 40
昭和10年入會、岸本商店勤務、昭和12年から22年迄の歐洲留學中アルプスを登攀、スイス山岳會員東大卒
加藤 泰安 41
昭和5年入會、理事、新アジア貿易通信社勤務、京大時代大興安嶺遠征隊長、昭和12、13、19、20年には内蒙古調査隊員として活躍京大卒
辰沼 廣吉 37
昭和16年入會、理事、慶大講師醫博、慶大山岳部入部以來、穂高、劍を中心に日本アルプスに活躍、國民體育大會登山部門で技術役員として貢献した、慶大卒
村山 雅美 34
昭和21年入會、理事、市田株式會社勤務、毎年國體登山の技術役員として活躍した。東大卒
山田 二郎 30
昭和24年入會、佐倉飼料株式會社勤務、國體登山の技術役員として活躍、ヒマラヤ委員會の裝備全般を受持つ、慶大卒
加藤喜一郎 31
昭和21年入會、佐倉飼料株式會社勤務、國體登山技術役員として活躍、慶大卒
村木潤次郎 29
昭和24年入會、早大鑄物研究科助手、早大山岳部監督、國體登山の技術役員、ヒマラヤ委員會の裝備關係擔當、早大卒
山崎 英雄 28
昭和28年入會、札幌醫大解剖學室勤務、北海道支部長山崎春雄氏令息、國體登山技術役員、北大卒
石坂昭二郎 24
昭和28年入會、東京出版販賣株式會社勤務、國體登山の技術役員として活躍、隊員中の最年少者、日大卒
竹節 作太 46
昭和12年入會、毎日新聞社運動部長、昭和3年、7年の冬季オリンピックのスキー競技に活躍、昭和11年ナンダゴットに立教大學登山隊と共に登頂、昨年はマナスル踏査隊員と共に活躍、早大卒
依田 孝喜 36
毎日新聞社寫眞部員、カメラマンとして參加、中大卒
中尾 佐助 36
昭和27年入會、浪速大學教授、京大時代にボナベ島、蒙古、朝鮮中央山地や大興安嶺、樺太等の學術探險を行い、昨年は踏査隊員として植物學を擔當、京大卒
川喜田二郎 32
昭和28年入會、大阪市大助教、大興安嶺踏査、南洋群島調査等の學術研究に參加、人文科學を擔當、京大卒

縣營家形ヒュッテについて
會報一六四號に紹介した家形ヒュッテは個人管理でなく高湯溫泉組合の共同管理である旨福島支部より連絡があつたので訂正する。
連絡先 福島縣庭坂村高湯溫泉組合。
收容人員 四〇名

Château Brillant

山頂で 山小舎で
アルペンの氣分が満喫出来る
純フランス式高級ブドウ酒

サドヤ醸造場 甲府市御膳戸町
(現品は山岳會ルームにあります)



山友社 高橋靴店
東京都新宿區三榮町3
電話 四谷 (35) 1929

八重洲口營業所開設
中央區吳服橋二の五
東京驛八重洲口下車
鐵網ビル筋向イ角
電話(27)五六五四

秩父の寸景

小野 幸



秩父の山小屋も以前に増して近頃は其の数もふえ、夏の間は番人も入る様になったので何といつてもたまさか、すこしの時間に山に入る連中には有難い。三峯の方から申すと、白岩山の小屋は新築後二年になるが相變らず番人がいる。富田さんの住んでいる雲取小屋はフラウと共に増々健康である。しかし彼は今自分の後継者を養成している。何しろ少くも十年がかりで教え込まねばねえ、とおつしやる。

この雲取山の向うの地圖にのみその面影をしのぶ甲州雲取小屋は今ところ當分建てられる見込みはなさそうだと。というのはこの主脈の南側、後山川谷の三條湯が復活されたからである。ここには大きな風呂場が作られ、そこに源泉が引かれていた。この湯は加熱されねばならぬ温度の低いものだ。以前はこの上手に湯小屋があつて長い長いこの後山川を辿つて来た登山者の宿所となつていたり、湯治のためわざわざ米を負つて村の人々が、このさみしい山の湯に登つていたのだが、昭和十何年かの暴風雨にこの小屋や主脈の向う側の大洞川の惣小屋は流されてしまつたのだつた。そして惣小屋は今も建てられずにあるが、この三條

その前に笠取小屋も復活した。だから雲取から主脈を縦走する定期便は必ずこの笠取が定宿となるので、將監にくらべてその利用率はぐんと上である。夏なればこのお隣りの厩坂小屋まで歩けるが、そんな急ぐ必要もあるまいし、この季節には番人もいるので樂なレイベンをした方が勝である。

お隣りの厩坂小屋も番人が入るのでよい。しかし廣瀬、赤志からの往還道が荒れているので、殆んど栃本からの人と縦走者である。この小屋は水場に近いが主脈からかなり降りねばならず、甲武信の小屋は道の側にあるものゝ、水場は遠い。したがつて厩坂に泊らぬ人は降りてまで立寄る必要のないことは勿論である。

甲武信小屋は長い間、鎌田さんが入つてくれていたが、昨年からは代が變つた。彼は雲取の富田さんに次いで秩父の山小屋では長い人であつた。といつても以前にはこの甲武信と厩坂と雲取の三人であつたのだが、厩坂は早く代が二度もかわつていたが、この小屋と雲取はずつと長く守つてくれただけに、鎌田の去つたこととはなじみの登山者ならずとも一まつたさみしさを感ずると思う。しかし今度入つた人は二十代の若者である。小屋番は單に小屋を守り、登山者を泊めるためにいるものではなく、親しくその小屋を訪れる登山者のカメラドともなり、先生でもあらねばならぬ。小屋番になるには十年かゝりまさい、と云つた富田仙人の言は哀しい言葉であるかも知れないが、そうした人を守つてくれる小屋に泊れる登山者

は幸福な旅人といふべきであらう。そんな意味から甲武信の新しい番人に多くの期待を持つのである。

この甲武信から西に流れる主脈には國師岳の大池小屋と金峰山の大日小屋があるが共に夏でも番人は入らない。従つてこの主脈を走る定期便は甲武信から大池をすぎ金峰を越えて、金山に降りるのである。以前は案内書などにもある金峰山の南、直下の御室小屋が使用され、その近くの遠藤小屋もあつた頃はかなり金峰から昇仙峽に降りたのであつたが、御室は朽ちたまゝかえり見る人もなく、遠藤小屋も焼失したまゝ、今ではその所在すら発見することが困難になつてしまつた。そんな所から今は金山に降りる者が増している。それに近年この金山の部落には前會長の木暮理太郎氏のリリフが置かれたので有名なつた。

それから、山小屋ではないが奥秩父の南面、笛吹川の廣瀬部落の奥、三、四十分の距離に近丸小屋と云う建物が出来た。小屋と申しては失禮かも知れない二棟の新しい家屋である。この主人の近丸さんは下の村から椎茸栽培のためこの地を開墾して生活しはじめ、登山者にその一棟を提供してくれ、ので、二股の小屋がない今日ではお助け小屋となつてゐる。この小屋から東澤を遡つて甲武信の小屋へは七時間、厩坂峠へも五時間かかるであらう。正しい小屋の位置は廣瀬から行つて赤志の部落への分岐からそのまゝ二股に向つて三丁程行つた道の右側にある。村の人はこの邊をバラ平と呼んでい

ヒュッテ・ジャヴエルを訪う

霧ヶ峯の奥に高橋達郎さんのヒュッテ・ジャヴエルという。あの邊の援助が出来たという。あの邊のスキー無しでも行けるから雪山気分を味わいにかゝる？」と神谷さん牧野さんのカメラ組を誘い、スキー組の金坂、仲さんも共に夜行に乘る。

上諏訪から、すぐバスで一時間餘、強清水に着いたのは二月十五日の朝八時、甲府から直行のバス客も交えて雪の山上は朝のラッシュアワリーの感。昔を識る者はたゞ驚嘆。

先ずヒュッテへとスキーを擔いで北行したが、雪が軽くボコボコ落ちるのでスキーを着ける。徒歩組に輪カンデキの用意を云わなかつたのでお氣の毒を云ふ。

終點から三十分餘、八島池へゆく道の中程、車山の北西斜面の澤のふちに冬枯の格の疎林に圍まれた小舎がひっそり立つてゐた。

今年は雪不足で、タケニンジンなど枯れ莖の立つスロープは、車山の空へと登り、西へ緩く擴がる雪原の彼方には、霧ヶ峯から美ヶ原の臺地、はるかに木曾御岳という遠山もぞく別天地だ。

愉しいわれらの山小屋は——まだ一月前に開いたばかりで、外見は整つてないが、ストーブを圍む部屋隅の煉瓦壁やスタンドも面白く、二階からの眺望は素晴らしい。二階のベッドで四人ずつの寢室も清潔だし——こりや、二、三十人の山友達と雪解の春か夏の日に、

る。廣瀬の煙草屋が宿屋をやめているので、登山者には大助かりである。また十文字小屋も新築された。

この奥秩父は森の深さが表看板なのであるが、その森の深さを見逃さぬ者が我々の他に今一人ある。それは材木屋である。いや、森がよいのではなく、それを構成する分子の樹木を欲しているのである。それは登山者にとっては野黨なのだが、中々この黨たるやあなどり難くこの秩父圏にも昔から勢力の手をのびしている。従つてこの伐られた木材を運ぶための自動車や軌道が著しく開通しているので、登山者も歩かず可成り山奥迄入れるようになったことだけしめてもなぐさめである。しかしそれだけ山肌が荒されていくわけで登山者にとつては芳ばしいことではなさそうだ。

その一つの場合として金峰山の隣りの小川山がある。この山は千曲川の支流、小川川の源流にある點から小川山と呼ばれているが、秩父を好む人々も中々訪問してこない山の一つである。一番樂な登路は小川川に沿うのである。それはこの腹がやけに伐られていた頃、この川の奥には伐採人の集りの小屋が村のように建てられ小學校まで開かれていた。それでこの小屋に宿をかりて樂に小川山を往復し、或いはこの峰を越して、大日小屋に出られたのだが、今では小川川口は利用されず川端下から、前述した金山や黒森から登られている。それはその伐木事業が終り、人夫が引上げたので伐採中の假橋が崩落ちたり、道

がいばらにおおわれてしまったのである。これが伐木のおかげで登れた好例である。

これを冬の例で云えば金峰山に登るとき、かつて遠藤小屋が御室の小屋の手前であつて、人夫が雪の中で伐採していた頃は、この小屋迄スキーで来て翌日は御室小屋でデポすれば、金峰山往復は半日もであつた。また金峰を越して七人行者から金山に一日で樂に降りられたのもこの遠藤小屋のおかげだつた。それは十年も前の話だが、その小屋主の遠藤さんは秋田人で、今はどうされているのであろうか、一度お宅でも音信をと思ひながら今日に至つてい

る。それから雪の西澤を縦横に歩かせてくれたのも、西澤の上流の京ノ澤小屋跡の上手にあつた三富嶺山事務所のおかげであつた。この主人は徳久さんといつて俳句のすきな名古屋の人であつた。今はその事務所もなく、この人もいまではどうされたらう。

しかし今日利用すべきものに國師岳の木馬道がある。それは甲州側の荒川に沿つて架けられたもので今では國師の大弛小屋直下に迄せまつてゐる。したがつて雪深い大弛を利用せずとも樂にこの飯場から國師岳の往復が出来る。國師の話が出たついでに奥千丈尾根のことを附記しよう。この尾根には以前より道があつたと云われもして五百分の一地圖にも西面に小道が記されてあるが、その道すらまつてくこの尾根筋は運を天にまかせて通つたものである。大低は乾徳山麓の徳和か柚口あたりから出

た。これもこれ黒く深い森の存するおかげで苦笑しなくてはならぬ。

人の住む、しかも社會生活といふ場所を越して廣い道路が開かれるとすれば、それは隣りの國に通ずる峠道か、山ふところに運搬すべきものを見出しこれを實行に移すときであるか、さもなければこの頃流行の觀光道路なのであるが、大體が運搬用の道路として開かれるのが關の山である。よそゆきの言葉で産業道路と唱えられるのである。かくして秩父の山にも次第に産業道路時代が麓から近づいて來るのである。しかしまだまだ雁坂峠から金峰山へ、そして小川山を越して信州峠への主脈は靜かな秩父の氣分をたゞよわせているから心配はあるまい。し

八頁より續く

もあつたが。それで脱走に當つても2週間後に戻つて來る事、脱走後の迷惑をかける事を託びる手紙を置いて行つたのであつた。食糧を密藏、登山用具を密造して脱走する。苦闘と饑餓に打ちのめされて戻つて來る。この本についての Alpine Journal の 1952 年 5 月號の Blakeney という人の書評の中に、英國人は極めて常識のある生活を重んじているが、どうも eccentrics を愛好する傾向がある…時に人々は氣まぐれにいろんな事をする。この “the mad Englishman” は他の國の人には了解し難いかもしれない。不合理なケタはずれの事を喝采する傾向があるという事を書いているのがこの收容所の司令官も脱走兵の sporting effort をアブリシエイトして規定による 28 日間の營倉行を7日にカットダウンして、しかも食物をふんだんに與え、圖書を與えたり、且又、格子の間から Mt. Kenya が眺められるように特に配慮したという事である。

略字：T.L.S.=The Times Literary Supplement (私は専らこれから山の本を求めている。英國ではなかなか山の本が出る。會報 164 號の諏訪多氏の「ドイツの山の本」も、續いて後の出る事を願つてゐる。)8/6 は 8 志 6 片。今 1 志は 55 圓位で計算。例えば 25/- の本は丸善あたりに注文すれば 3~4 ケ月後に到着して、1375 圓位。本は他の品物の値段に比べて安いものであると我々は考へるのである。

山の大學教室などするといひ、と私は、空想に耽る。晝頃から粉雪の舞つてきたのも冬山氣分には満點で、小舎近くに兎ばかりか狐や笹熊の足跡を見て只趣一入。

村井米子

かし一日一日とこの秩父風景をむしばむ何物かがせまつてゐることは事實である。そんな點からすれば秩父巡禮をしたい人はここ四五年中にまわつてしまわないとまずいのではないか。まだこの山々を知らぬ人々に、これが秩父だと今の秩父をすすめても、おそすぎぬと思うのである。

(二八・三・一)

Gurkha, ネパール國史, ネパールの音楽, 其他を Sir Clutha Mackenzie, T.C. Wilkinson, A.D. Percival 等も執筆。

—Fosco Maraini: Secret Tibet

60 photos, Eric Mosbacher 英譯本。Hutchinson, 1952 30/-

チベットの住民とその生活を記述。P. Fleming が Observer に大へんほめている。

—R.K. Ekvall: Tibetan Skylines

Gollanz 12/6

チベットに永く住んでいたミショナリイがその住民と生活について書いたもの。

—Stanley Snaith: Mountain Challenge

158 頁, 8 photos The Percy Press, 1952 8/6

New Zealand, The Caucasus (Ushba), Norway, The Alps (Täschhorn), Alaska (McKinley, Logan), Pamirs (Garmo), The Himalaya (Chomolhari) 登山につき記述。この人はさきに At Grips with Everest 及 Alpine Adventure 等の山の本を書いている。いずれも大きくない本。Everest は 1937 年に出て 1945 年重版。T.H. Somervell が序文を書いているが、この本を読む少年少女の中からやがてヒマラヤで力を試そうと心がける人たちの出る事を期待するとあるが、「山岳」46, 47 年號の日高氏の「ギド・レイについて」の中のアルピニスト・アクロバチコを手にして「この本は決して自分の子供たちに読ませまいと決めた」と言つた御婦人のことを想い出した。

—Peter Fleming: A Forgotten Journey

Rupert Hart-Davis, 1952 10/6

1935 年の“News From Tartary”の前に Ukraine や Caucasus や Samarkand などへ行つた、それらをも含めた旅行日誌をはじめて発表した。もう 20 数年たつた。「會報」61 號書評及 160 號「ピーター・フレミングのこと」参照。

—Colin Wyatt: The Call of the Mountains

Thames & Hudson 35/-

世界各地で行われた登山記。

—Frank S. Smythe: Swiss Winter (30/-), 56 photos; Snow on the Hills (25/-), 47 photos.

どちらも Adam & Charles Black から 1952 年に 12/6 の popular edition が出た。

—Sir Arnold Lunn: The Story of Ski-ing

208 頁, illus. Eyre & Spottiswoode, 1952. 21/- Alpine ski-ing の父といわれる Lunn による 1888 年からのスキイの歴史。Lunn は昨年スキイングと英國とスウイツランドとの関係についての功績によつて Knighthood を贈られた。さきに同じ出版社から“Mountain Jubilee” 304 頁, 16 illus. 18/- の著書を出した。

—George Seaver: Francis Younghusband, Explorer and Mystic, 1863-1942

John Murray 25/-

1952 年秋に出版豫定の豫告を見て、その到来を大いに待っている本の一つであるが、まだ出ないようである。

Seaver は Edward Wilson や Scott や Schweitzer の評傳の著者。「シユヴァイツエルその人間と精神」は昨年翻譯が出た。

—F. Kingdon-Ward: Plant Hunter in Manipur Jonathan Cape, 1952 15/-

—Jean Kingdon-Ward: My Hill so Strong

Jonathan Cape, 1952 15/-

Kingdon-Ward 夫人。良人と アッサムとチベットの國境への植物採集旅行記。

Kingdon-Ward の著書は多い。その“A Plant Hunter in Tibet”のことは會報 49 に書いた。

會報 162 號の「山の本、(3)」の中に“‘No Picnic on Mount Kenya’”の事を書いてイタリア兵が俘虜收容所からケニヤへ單に「脱走する」と書いたが、たゞ逃げ出す爲に脱走したように誤解されてはとこゝに訂正する。事實は全くケニヤへ登りたくて脱走したのである。(その底には人間が人間によつて行動を縛られるという事に反抗する精神 ~七頁に続く~

歐洲最高の峯と極北の岬

—— 山て遇つた人たち ——

日 高 信 六 郎

モンブランは歐洲の最高峯だがその登路は長く険しい氷雪の上をたどつてくるしく、雪崩の危険がある以外大した困難はない。巨大な氷河が頂上からたがり落ちるすがたを示すなかに、突き出ている岩峯にへばりつくグラランミユレの小屋(三〇五一米)にとまり、夜半すぎにたゞき起こされて、ねぼけ眼をこすりながら、ラスタンのはのかな明りをたよりに氷河を覆う雪のうえに先人の足あとをたどりつゝ、雪橋を危くわたつてクレヴァースをこえる。頂上直下海拔四千メートルのグランブラトの一大だるみで一休みし、右に折れて山稜にとりつくと、俄然傾斜が急になる。この邊からいちじるしく呼吸が苦しくなり、靴やビツケルがにわかに千鈞の重みを加えて十歩ものぼると一息つきたくなる。山にはなれ切つて二人のガイドも顔色がわるく黄色がかつて見え、息をきらせて一本立てようと云いだす。

その上手に小さな避難小舎がある。頂上は少し下手に二三の巨岩が頭をだす外は、全く雪のドームにすぎない。せまい雪稜をたどつて山頂に立てば、風は強く身を切る寒さだが眺望は絶佳、萬物足下にひれ伏す壯観である。シャモニーの谷は直下はるかに、きそい立つエギユの尖峯はメイル・ド・グラスを壓して低く、スイス・アルプスの方は、群峯亂立壯大をきわめる中に見おぼえのあるユングフラウ、マッターホルン、モンテローザなどが胸をおどらせる。イタリア側から南フランスの山や丘まで見たせる三百六十度一望の大觀に我を忘れて見入つてみると、二人のガイドをつれて登つて来た小柄な中年のフランス人がまだあらゐ息をつきながら近付いて来て手を握るなり「ムッシュ、踊りましょう」という。僕はそれないから駄目ですよ。と答える私にむかつて「今まで二度も登りかけては志を遂げなかつたのが、こないだ天氣にこの頂上に立つて、踊らないということがあるのですか」とむりに私を抱えこんでしまう。二人とも毛糸の頭巾からわずかにのぞいている顔めいクリムが黄色な日やけ止めし、彼のは即席に焼いたコルク

近頃英國で出版された山の本(4)

田 辺 主 計

—H.W. Tilman: Nepal Himalaya

271 頁, 61 photos. C.U.P., 1952. 25/-

1949 年の Langtang Himal (Ganesh Himal), 1950 年の Annapurna Himal, 1950 年の Everest の Nepal 側行きの三つの旅行記。写真は總て著者の寫したもの。Manaslu のプラトオに續く北リッヂの寫眞はさきにアルパイン、ジャーナルに出たもので、マナスルウの寫眞として我々が初めて見たものであつた。Everest の方は Nanda Devi Party の一人 Houston と同行、Namche Bazar から Khumbu Glacier に入っている。これが 1951 年の West Cwm. に入つた先驅となつている。Tilman のいつもの皮肉な諧謔 (sardonic humour), 辛辣な冗談 (trenchant witticism) は隨所に出る。そして住民とその生活への深い觀察、又未知の國での荒々しい旅行に對する彼自らの喜びが見事に表されている。と T.L.S. 書評にあつた。

—Maurice Herzog: Annapurna

Nea Morin, Janet Adam Smith により英譯。Eric Shipton 序文。288 頁, 4 colour photos. 24 photos., maps. Jonathan Cape, 1952 15/-

この原書に就ては會報 162 號に深田久彌氏の紹介がある。Marcel Ichac の忠實な日誌の助けをかり、兄弟の Gerard の日々の倦ない勤ましと慰めがなかつたらこの本は出なかつたらう、と序文にある。この口述による記述はそれ故に、いつそう vivid である。序文の中に、人間の世界のいよいよの處、人力の限度に達し、その限度を一步のり越へる時に、何かその素晴らしいものを知つた。苦しみの最極度にあつて、今まで氣付かなかつた何か更に深嚴なもののあるのを知つた、とある。寫眞の中の成功の後の

慘憺たる引上げの數葉は悲壯である。會員の某氏は原書を読みその餘りに生々しい記述に、時々本を於いて休んだと云い、又某氏はこの英譯本にとりつかれ電車の棚の上に所持品を忘れた事を會社へ着いて氣がついたという。どちらも 50 歳を越した人たちである。この英譯本は 3 版を重ねている。Dr. Longstaff の This my Voyage も、すぐ重版された。歐米ではこれらの本を日本でいう「山岳書」としてよりも、人々は Travel, Adventure の本として愛讀する。

—Eric Shipton: The Mount Everest Reconnaissance Expedition 1951

128 頁, 92 photos, maps, $10\frac{1}{5} \times 8\frac{1}{2}$ Hodder

& Stoughton 1952 25/-

The Royal Geographical Society と The Alpine Club との Joint Himalayan Committee に代つて Shipton が著したもの。1951 年 Everest へ Nepal 側からの Expedition の本。序文にも寫眞を主として記述はそれの background としてであるとあるように、Project, March, Ice-Fall, Exploratory Journeys を含む 40 頁にすぎない。寫眞は素晴らしい。先に出た The Times の Special Supplement を見た人はこの書をも求めたくなる。この Expedition の概要は「山岳」第 46-7 號のヒマラヤン・ノートにある。

—The Norwegian Himalayan Expedition: Tirich Mir Sölvi 及 Richard Bateson の翻譯本。

192 頁 57 photos, maps Hodder & Stoughton 1952 21/-

1950 年の Norway 隊の Tirich Mir (25,264 ft.) 登頂記。1949 年の踏査行、1950 年の登頂記を Prof. Arne Naess 執筆。會報 160 號望月氏「ティリチ・ミール」参照。T.L.S. は所々英譯語が充分でない處があるのは遺憾と書いている。

—R.N.W. Bishop: Unknown Nepal

124 頁, 25 plates. Luzac, 1952 16/-

Kathmandu への道、ネパル村落生活と宗教、戦時中の

の灰をぬりつけて眞黒くそれに流れた汗のあとがハッキリと、いづれも二目と見られたものではない。この見ず知らずの二人の小さい男が、逞しいガイドに綱でつながれたままグルグルまわつて、海拔四千八百メートルの頂上の雪をふみかためての雪を見た、あのガイドたちでなくとも腹をかみえ手を打つて興じたにちがいない。寒風にふるえながらもつて来たシャンパンをまわりのみしたのち、二三のパーティとすれ違つて避難小屋まで降りると、そこには昨夜の小屋に泊りあわせた人たちが十人あまり、その大部分は山酔いに苦しんで坐りこんでいた。私はそのまゝ山稜を傳つてエギュー・デュ・グーテから懸崖を降りその日のうちにシャモニーに歸つた。それから二年のちの七月なかば私はノールウエーのベルゲンから出るフイヨルド巡航船にのつていた。一千トン餘りの小さいノールウエー船だが、なかなかぜい澤な遊覧船だ。乗客は六十人あまり、その大部分はアメリカ人、ほかに数人の英國人と北歐人の外にはイスとフランスの二夫婦、それに東邦人一人という組み合わせ。二週間の費して峽灣の奥をきわめ、馬車やモーターボートを使つて谷をさかのぼつたり湖水を渡つたり、氷河にのぼつたり見たり、ラブランド人のキャンプを訪ねたり、その間には北極圏を越えるとき、海神があらわれてお客に免狀を渡したり、糸をたれて鯨つりをしたり、夜半にティーパーティをひらいて沈まぬ太陽を眺めたり、

氣ままで愉快な旅であつた。その懸巻は歐洲極北の北緯七十一度十分二十四秒に位する海拔三百メートルのノースケープのぼりである。夜半について、懸崖につけて岬頭に立てば、大氣の工合も植物の景觀も高山の頂をふむに異ならず。北にのぼる海は、薄雲にかくれた太陽の光をにぶく反映して、おだやかなさゝ波のおもてははしてもない。夜半というにシャッターで寫眞をうつすという明るさである。船の中でも陸の見物でも、乗客は思い思ひにかたまつて話題は盡きず、アメリカ人の間には高笑いとシガーの煙とが絶えない。この船旅は私の若い頃の最も楽しい思い出の一つである。お客の中で英語を話さぬ唯一の組は L 氏夫妻であつた。ほかに佛語を話すものがないものだから、私とはすぐ親しくなつていつも行動を共にした。二人とも相當の年配、アルサスのミュールウーズに住みフランスでは名の通つた機械工場の持主で肥つた氣のよい人であつた。フランス人には珍らしい旅行家だけに話題も多く話はずむ。その合間にふとモンブランの頂上でもらつた名刺のアドレスを思い出して聞いた見ると、あの F さんなら近くに住む判事さんで毎晩のようにお茶のみに来る親しい間柄だとのこと、早速書きをして送ることになつた。山頂の舞踏のありさまを話して三人ともまたまた腹をかかえた話も今からもう三十年ほど前のことになる。



山日記 (昭和28年度版) に 寄せられた聲

山日記 (昭和二八年版) に挿入されたカードが會員その他から二百枚近く寄せられたので、その中のクツ評欄のみを一部抜粋してみた。全般的に見て好評であるが、いろんな意見は編集上、また會の運営上今後の参考になることが少なくない。

○山岳團體の頁が多すぎる。代表機關 (各縣の) だけにしておいてその用紙を他に使つてはどうか (甲府工高山岳部 小林巖)

○毎年購つていますが、本年版は内容が劇的に豊富になり、山日記としては蓋し完璧な物になったと思ひ新年よりのスキー行の際の利用價值を大いに期待しています (不忘山岳會 關口竹治)

○非常によく出来ているので感謝しています。只慾を云えば山岳文獻 (洋、和) 並びに山岳用具の寫眞をのせていただきたいですが (東北大學山岳部 渡邊健治)

○今までより情緒味が出ています。歌や花の解説なんかは良い。廣告もなかなかデザインがよく良い感じを受ける。概して良好。 (岡山大學山岳部 三好淳介)

○表紙裏へ従前通り所有者欄を設けた方がよい。案内人、日程表は必ず記入。用品表が小さすぎる。表でよい。友は不用。歌の欄が餘り出過ぎた。山岳文獻抄は必要だ。それには山岳圖書の書店の廣告を充分出すことも有効と思う。 (倉敷レイヨウ KK 山岳部 内藤肇)

○非常に便利です。山行の時ばかりでなく、日常ズボンのポケットに入れて持ち歩いています。高山植物の圖は色刷であれば尚よかつたと思ひました。その爲値段の高くなるのは我慢致します。 (新ハイキングクラブ 高見勝夫)

○経験が浅くて寸評までとは行きませんが戦後出版の度毎に利用さしていただいておりますが漸次進歩致しております事は我々山岳を愛する者にとつては最も良きプレゼントです。 (秋田縣大館市桂成小學校 畠山陽一)

○スキーの事が少し足りない様に思う。又初心者のためのコースがもう少しあるといいと思う。 (慶應義塾高校 大田雄一郎)

○かなり使いよくなりました。ただ應急手當の項をもう少し圖等を入れて見やすとした方がよいようです。又山小屋についてもまだ完全とは云えぬと思います。 (武蔵高松山岳部 大坪秀二)

○登山向鐵道主要乗降驛間の時間表、運賃表があれば便利です。自由日記欄がもう少し頁数が多い方がよいと思います。 (星峯峯)

○内容は大変よくなったと思ひます。樂譜を入れたのは感謝します

じを受ける。概して良好。 (岡山大學山岳部 三好淳介)

○表紙裏へ従前通り所有者欄を設けた方がよい。案内人、日程表は必ず記入。用品表が小さすぎる。表でよい。友は不用。歌の欄が餘り出過ぎた。山岳文獻抄は必要だ。それには山岳圖書の書店の廣告を充分出すことも有効と思う。 (倉敷レイヨウ KK 山岳部 内藤肇)

○非常に便利です。山行の時ばかりでなく、日常ズボンのポケットに入れて持ち歩いています。高山植物の圖は色刷であれば尚よかつたと思ひました。その爲値段の高くなるのは我慢致します。 (新ハイキングクラブ 高見勝夫)

○経験が浅くて寸評までとは行きませんが戦後出版の度毎に利用さしていただいておりますが漸次進歩致しております事は我々山岳を愛する者にとつては最も良きプレゼントです。 (秋田縣大館市桂成小學校 畠山陽一)

○スキーの事が少し足りない様に思う。又初心者のためのコースがもう少しあるといいと思う。 (慶應義塾高校 大田雄一郎)

○かなり使いよくなりました。ただ應急手當の項をもう少し圖等を入れて見やすとした方がよいようです。又山小屋についてもまだ完全とは云えぬと思います。 (武蔵高松山岳部 大坪秀二)

○登山向鐵道主要乗降驛間の時間表、運賃表があれば便利です。自由日記欄がもう少し頁数が多い方がよいと思います。 (星峯峯)

○内容は大変よくなったと思ひます。樂譜を入れたのは感謝します

○ヒマラヤ時代となりて地圖を入れたのは成功、但しアコンカグアにも一頁割れなかつたでしようか。山小屋に大分手落ちがある様ですが巧な編集ですばらしい。 (アルプス會 神谷達也)

○概念圖が冒頭に、又天氣圖、山の歌、高山植物圖が挿入されている點、年々改良されて喜ばしい。日時計も可。 (京都山岳連盟 樺澤弘治)

○非常に良心的な日記ですが、スキーについて各スキー場とツアーコースについて詳記せられたい。 (濱松アルパインクラブ 森下薫)

○白紙の多くなつたのは賛成、日記欄もあれで結構、その他記事大變満足しています。記事内容につき實地に氣付いた點あればその都度お知らせします。 (津峠の會 川喜田壯太郎)

○少々價が高くなくても廣告は無くすべきである。日記欄は少し狭くつた方がよい。グラフの黒がこすぎてつかいにいい。 (國策バルブ旭川工場 脇神明夫)

○四國山群の略圖を入れるのであれば吉野群山、大山、九重山群等の略圖も入れてはしかつた。私達の山岳會が記載されてはいい。 (松下無線山岳會 淺地良一)

▼會員はもとより一般読者からも好評を頂き編集員一同喜んで居ります。売れ行きに關しても予期以上の成績をあげて居ります。本号に対する希望や御意見を参考にし、来年度の編輯を始めました。御期待下さい。 (山日記編集委員會)

圖書紹介

ヒマラヤ・ネパール

岩波寫眞文庫 B6 判
岩波書店編集部編
六四頁 一〇〇円

マナスル踏査隊の寫眞 (毎日新聞提供) と簡単にしてきわめて要領を得た記事によつて、マナスルを繞るネパールの山、氷河、溪谷、村落、道路、住民、そしてその宗教と生活が、概觀的にではあるが遺憾なく表現されている。マナスル、アンナ・プルナという今世界の登山家の視聽を浴びている二つの山のプロフィールが、とにかく百圓という安價で日本の山岳愛好者に紹介されるというだけでなく、マナスル風の風貌に至つては高價な洋書の中にさえ發見することは至難である。その點でこの寫眞文庫は極めて高い價值をもっているものと云わねばなるまい。

ネパールの山岳の持つ美しさ、峻巖さ、巨きさはこの寫眞文庫によつて聞きしにまさるものであることを讀者は痛感させられるであろうが、その山群の奥深く氷河とモレーンのほとりには人間の生活が浸入していついて人間の生活と驚きの念を禁じ得ない讀者も少なくないであろう。

ヒマラヤを越えてインドとチベットを結ぶチベット道は、かつて中國とヨーロッパをつないだヘデインの絹街道を思い出させるように、その街道の左右に展開

されるチベットとインドの原始的文化の交錯した風景、風物に云い知れぬ懐かしさを感じる人も多かる。

★中村清太郎作品頒布會

會員、中村清太郎畫伯は「生きている限り少しでも山を描く仕事を進めてゆきたい」という念願から左のような畫會を思ひたち次の如き要旨で小品の申込みを受けている。もちろん大幅の註文も結構だし、素描、淡彩も辭せず、圖柄もなるべく希望に副いたものとす。拂込みは二、三回乃至六回の分割でよく、半額に達した時に繪をお渡しするといふこと。 (一時間に全額拂ひの時は五分引)

油繪 四號 九〇〇〇圓
同 八號 一八〇〇〇圓 (何れも額装)

要は欲しい方にできるだけ廉價に差上げた素志だから御相談によつて如何様にも便宜をはかると云うことです。

アトリエ・東京都杉並區阿佐ヶ谷三ノ四九九

★會費未納の方へ★

年度末になりました。本年度會費未納の方は至急御納め下さるよう特にお願ひ致します。

・東京支部會員 八〇〇圓
・地方會員 六〇〇圓

會務報告

小集會記事

第一四九回 二月十九日(木)夜
講演「マナスルウ再舉に當りて」
講師 會員 高木正孝氏
尚今西隊の撮影した天然色スライド約百枚の映寫があつた。

役員會

一月 役員總會(廿一日)
議事 マナスルウ登山について
1基金募集の件 目標額六〇萬圓
2メンバーの件 松方理事長より
左の者がヒマラヤ委員會にて選出された経過を報告。このメンバーの中から最終的に決定することとする。

三田、西堀、高木、田口、加藤
(喜) 山田、村木、石坂、中尾
川喜田(科學班) 竹節、依田
(毎日新聞より)
3.日本體協が十七日の役員總會で
マナスルウ登山に協賛することを
決定

二月 役員總會(廿七日)

議事 來年度役員選出に關する
件、新しい構想で行くこととしこ
れが立案を成瀬理事を中心にして
進めて行き三月の役員總會にて最
終案を作り、四月の會員總會に上
提することとする。

★マナスルウ登山隊歡送會

三月上旬出發を豫定された隊長
三田幸夫氏以下十五名の壯途を祝
うため會は二月廿八日(土)午後
六時から三井本館七階の食堂で歡
送會を開催した。全隊員(川喜多
のみ缺)が列席、會からは横會
長、松方理事長をはじめ、武田、
近藤、鳥山名譽會員、在京の主な
會員、十數名の地方支部長支部會
員等が顔を揃え、來賓として東體
協會長、加盟體育團體代表者、學
術關係で特に援助をうけた數氏及
びネパール國から留學中のクリシ
ユナ、ラナ兩氏を迎え總數八十六
名に達する盛大な集りであつた。

席上横會長の挨拶についで松
方理事長から隊員の紹介があり東
體協會長の歡送の辭についで三
田隊長が隊を代表して挨拶、その
後は武田、近藤諸氏等から歡送の
辭があつて一同うちとけて歡談し
つゝ八時半會を閉じた。尚地方在
住會員、京大關係者からも數通の
祝電をうけた。司會林理事。

★早大遠征隊歸國の途に

去る一月廿六日アンデス山脈の
最高峯アコンカグアの登頂に成功
した會員關根吉郎氏他五名の遠征
隊は在留同胞の盛大な歡送裡に三
月七日ブエノスアイレスを出帆の
大阪商船サントス丸で歸國の途に
ついた。五月早々横濱入港の豫定
である。

★スウェン・ヘディン

博士記念講演會

昨秋長逝した瑞典の中央アジア
探險家ヘディン博士を記念する講
演會が、地學協會及本會等を含む
六團體共催の下に去る一月廿四日
(土)午後文京區東洋文化研究所
で催された。『ヘディン博士の足
跡をしのびて』石田幹之助
『ヘディン博士と地理學』辻村太
郎博士の二講演並に瑞典公使の挨
拶があり、別室には博士の肖像、
著書、書簡等が展示された。

▼山岳第四八年發刊豫告

本年度の山岳は來る六月刊行の
豫定で目下編集に着手しました。
内容の詳細は會報次號で發表しま
すが、巻頭には今西氏の筆になる
昨年のマナスルウ踏査行が寫真地
圖を添えて掲載される豫定です。
總頁約二〇〇頁、寫眞二十葉。

(編集委員) 田邊主計、成瀬岩
雄、諏訪多榮藏、望月達夫

◎會報前號六頁收載のスケッチは
「西方から見たマナスルウ」で筆
者は昨年の隊員田口二郎氏。説明
を落したので附加えます。

★マナスルウ登山隊出發

本年のプレ・モンズーンを期し
て登攀を開始する本會のマナスル
ウ登山隊は、其後準備萬端完了し
三田隊長以下十五名の隊員も決定
され(前號發表)その先發隊四名
(田口、加藤泰、村山、加藤喜)
は三月四日夜半羽田發でカルカッ
タに向い諸般の準備にとりかゝり
本隊の三田隊長以下十一名は十八
日夜半羽田發で勇躍壯途につい
た。一行は三月下旬カトマンズを
出發ブリ・ガンダキ川を溯つて四
月廿日頃に根據地のサマ部落に到
着、五月以降六月十日頃迄に登攀
を完了する豫定である。登山の經
過は會報及毎日新聞等で御承知願
いたい。本計畫の當初から絶大な
後援を與えられた毎日新聞社並に
會員各位に對し本會は衷心感謝の
意を表する。

★次号原稿のべ切

五月一日 原稿はなるべく一行
十五字詰に願います。

支部の活動狀況、會員、通信、紀
行情報等特に御寄稿を希望します

昭和廿八年三月廿五日發行

東京 都千代田區
神田駿河臺四ノ六
發行所 社團 日本山岳會
法人 渡邊公平

電話(自五二一) 日本體育協會
神田室五二一 振替口座東京四八二九番

東京都港區赤坂溜池五番地
印刷所 株式會社 技報堂



スキー用品

東京・新宿駅前
かずみ
TEL (35) 2959

昭和28年度版

山日記

定價 ¥ 230
好評・發賣中



ビニール製の防水カバーが
出来ましたから御利用下さい。
鉛筆さしのついた頑丈
なものです。 ¥120

東京 茗 溪 堂 神田

あなたのテーブル

ニッカ
ウ井スキー



を飾るにふさわしい
この風味、この装い

新角ビン ¥380 ★ ポケット壺 ¥150

登山用具の専門店

好日山莊

プライスリスト進呈

東京 店 海野 治 良
中央區銀座西二ノ五 電話京橋(56)3600
大 阪 店 西 岡 一 雄
北區堂ビル前 協和銀行三階
神 戸 店 島 田 眞 之 助
生田區三宮町一ノ三二ノ一

PRICE LIST 進呈

★電話變更のお知らせ 千代田(27)七六八六★

登山とスキー具

イワタ

東京 中央区日本橋江戸橋1-7 TEL(24) 3725

スキーと服装

スキー行に一番主要な
役目を持つスキー靴は
南獨得の技術 最高の
材料で作つたものをお
奨めします。

スポーツ用品

神 田 小川町通 中 央 角
ミナミ TEL(25) 1353

スキー材はスキー王國
ノールウェーに於て製
造された世界的有名品
が入荷致しました。

オールヒツコリー
コンパイント

其他數種類

スケートは
カナダ CCM

國產有名品豊富